# 瑞泉寺

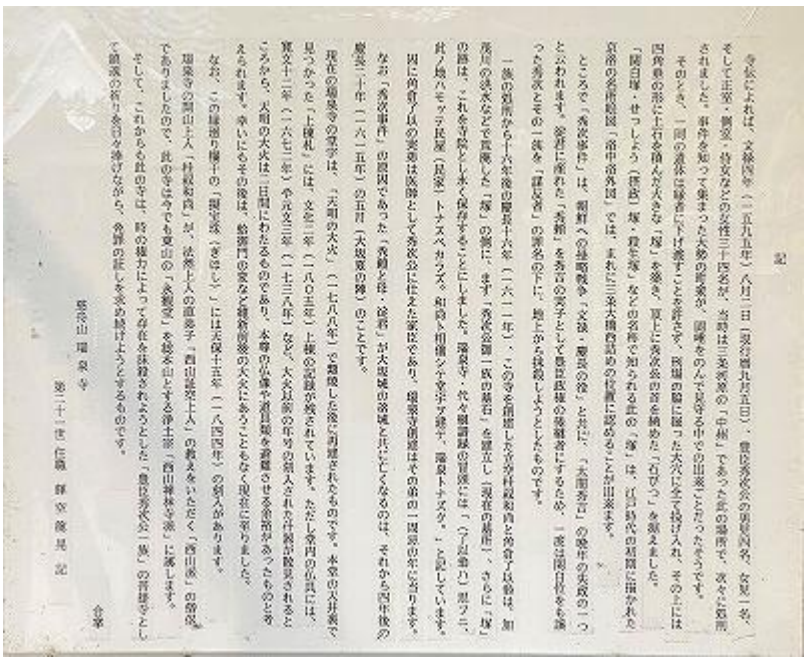
端泉寺は、豊臣秀次一族を憐れんで角倉了以が建立した寺です

秀次墓碑

正門

秀次供養塔

中央左の黒い額の中には、三条河原で処刑された三十余名の氏名が掲載されています



寺伝

記

寺伝によれば、文禄四年（一五九五年）八月二日（現行暦九月五日）、豊臣秀次公の男児四名、女児一名、そして正室・侍女などの女性三十四名が、当時は三条河原の「中洲」であった此の場所で、次々に処刑されました。事件を知って集まった大勢の民衆が、固唾をのんで見守る中での出来ごとだったそうです。

そのとき、一同の遺体は縁者に下げ渡すことを許さず、鴨川の脇に掘った大穴に全て投げ入れ、その上には四角形の形に土石を積んだ大きな「塚」を築き、頂上に秀次公の首を納めた「石びつ」を据えました。

「関白塚・せっしょう（摂政）塚・殺生塚」などの名称で知られる此の「塚」は、江戸時代の頃に描かれた京洛の名所絵図「洛中洛外図」では、まれに三条大橋西詰めの位置に認めることが出来ます。

ところで、「秀次事件」は、朝鮮への侵略戦争「文禄・慶長の役」と共に、「太閤秀吉」の晩年の失政の一つとみられます。後継に選ばれた「秀頼」を秀吉の実子として豊臣政権の後継者にするため、一度は関白位をも譲った秀次とその一族を「謀反者」の汚名の下に、地上から抹殺しようとしたものです。

一族の遺骨から六十六年後の寛永十六年（一六三九年）、この寺を創建した京都妙蓮寺の第十六世「日乗」の側に、まず「秀次公御一族の菩提」を建立し「現在の基礎」、さらに「塚」の脇は、これを寺院とし永く保存することにしました。瑞泉寺・代々の住職記録の冒頭には「ウチ山動ク」黒フニ、此ノ地ハモッテ民屋（民家）トナスベカラズ。和尚ト相議シテ寺ヲ建テ、瑞泉トナズケ。」と記しています。

因に、角倉了以の実妻は医師として秀次公に仕えた家柄であり、瑞泉寺開基はその弟の一男児の年に当ります。

なお、「秀次事件」の原因であった「秀頼と母・淀君」が大坂城の落城と共にどくなるのは、それから四年後の慶長二十年（一六一五年）の五月（大坂夏の陣）のことです。

現在の瑞泉寺の堂宇は、「天明の大火」（一七八八年）で類焼した後に再建されたものです。本堂の大井表で見うかった「上棟札」には、文政二年（一八一九年）上棟の記録が残されています。ただし、堂内の仏具には、寛文十二年（一六七二年）や元文三年（一七三八年）など、大火以前の年号の刻入された什器が散見されるところから、天明の大火は二日間にわたるものであり、本尊の仏像や道具類を避難させる余裕があったものと考えられます。幸いにもその後は、伽藍門の変化と建物崩壊の大火にあうこともなく現在に至りました。

なお、この縁起り棟子の「開宝珠（きほうし）」には天保十五年（一八四四年）の刻入があります。

瑞泉寺の開山上人「村叔和尚」が、法然上人の直弟子「西山浄土上人」の教えをいただく「西山派」の宿坊でありましたので、此の寺は今でも東山の「永観堂」を総本山とする浄土宗「西山禅林寺派」に属します。

そして、これからも此の寺は、時の権力によって存在を抹殺されようとした「豊臣秀次公一族」の菩提寺として鎮魂の祈りを日々捧げながら、名誉の証しを求め続けようとするものです。

瑞泉山　瑞泉寺

第二十一世　住職　釋宗徳　見記

（画像をクリックすると拡大して見られます）